CAJ

THE COMMUNICATION ASSOCIATION OF JAPAN

日本コミュニケーション学会
第 43 回年次大会

コミュニケーション学と教育

Communication Studies and Education

立教大学（東京都豊島区）

2013年 6月 22日(土)～6月 23日(日)

June 22-23, 2013

Rikkyo University

共催：立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科言語科学専攻

[大会参加者へのご案内]

1. 受付は、立教大学、11 号館 1 階にあります。会場は同じビルの 2･3 階ですが、それぞれの会場へ入る前に、必ず受け付けにお立ち寄りください。
2. 大会参加費は、2 日間で会員 4,000円(当日払いは 4,500円)、非会員の方は 5,000円です。参加費にはプロシーディングス代を含みます。参加ご希望の方は(会員･非会員同様に)、学会ホームページを通じて、6 月 14 日(金)までにお申し込み下さい。年次大会へは CAJ 学会ホームページより、**オンラインで申込みください。郵便振込用紙は同封しておりません。**
3. 大会当日の日曜日は、大学内のカフェテリアが営業していません。大学周辺にレストランやお弁当屋さんがありますので、こちらをご利用ください。したがって今大会では、例年行っているお弁当の申込みを受け付けませんので、ご留意ください。
4. 懇親会の参加費用は 5,000円です。当日参加も可能ですが（若干名)、予約の関係上できるだけ大会参加の申し込みの際に合わせて申込みください。懇親会申込みは、大会参加申込み同様に、学会ホームページからお願いします。懇親会はアル･テアトロ(東京芸術劇場 2F)で行われます。池袋駅前ですので、懇親会場へは徒歩で約 7 分ほどです。
5. 年次大会の期間中、書籍やジャーナルのバックナンバー等の販売を行っています。また、飲み物等の用意がございますのでご利用ください。
6. 会場内・会場周辺は全面禁煙です。所定の喫煙所をご利用ください。

[発表者の方へ]

1. 機器をお使いになる方は、使用可能機種および操作等の確認を予めお願いいたします。PC 、プロジェクター、及びスクリーンは発表教室の全てに設置されております。特別でない限り、パソコンを持参する必要はありませんので、データのみご持参ください。Mac の利用者で、Mac を持参されたい方は、ケーブルもご用意ください。また、操作については午前中の発表の方は、最初のセッションが始まる前、午後の方は昼休みにご確認ください。
2. 研究発表は、質疑応答を含めて 30 分です。時間厳守でお願いします。
3. 研究発表をなさる方は、**完成論文のコピー**を当日お持ちください（目安として 20 部程度)。必ず 1 部を受付にご提出ください。そして、それぞれの発表会場で、各自コピーを配布してください。**プロシーディングスの原稿は完成原稿ではありません。**この点十分にご留意ください。会場には、コピーする場所はございませんので、その点もご注意ください。
4. やむを得ない事情で発表ができなくなった方は、すみやかに学術局までご連絡ください。なお、当日の緊急連絡は以下の 3 つのメールアドレスに同時発信でお願いいたします。

[司会の方へ]

1. 発表開始 10 分前までに会場に入り、発表者と事前の打ち合わせを行ってください。
2. 発表開始と発表終了の時間を厳守してください。発表終了の時刻になったら、次の研究発表に移ってください。
3. 発表が取り消しとなった場合は、次の発表の前倒しをしないで、その時間帯をあけておいてください。事前に研究発表の取り消しを、学術局が把握している場合は、その旨をお伝えします。

[理事の方へ]

1. 大会前日の 6 月 21 日（金）に、立教大学 12 号館 2 階会議室にて、理事会が開催されます。時間は 15：00～17：00 です。ご参集よろしくお願い申し上げます。

事前問合せ先：
会場校担当(大会実行委員長)　師岡　淳也
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1
E-mail:jmorooka@rikkyo.ac.jp
発表・論文について：
学術局　守﨑　誠一　E-mail:morisaki@kansai-u.ac.jp
事前問合せ（参加費等について）及び当日問合せ先：
事務局　五島　幸一　E-mail: cajoffice@caj1971.com

[Information for Participants]

1. Please register at the registration desk upon your arrival, located in the first floor in the Building Number 11at Rikkyo University.
2. The conference fee for two days is ¥4,000 (¥4,500 at the door) for members and ¥5,000 for non-members. Please pay through the on-line registration by June 14 or at the reception desk during the conference.
3. The school cafeteria will be closed on Sunday (June 23). There are some restaurants and lunch-box stores which are close to the university. Therefore, the Conference Office does not provide lunch-box on June 22 and 23.
4. The convention dinner will be held at **ALTEATRO (Tokyo Metropolitan Theatre, 2nd floor)** which is near Ikebukuro Station. The fee is ¥5,000, payable only in advance by the on-line registration, or at the conference desk on a first-come-first served basis (limited to about 10 people).
5. Books and back issues of CAJ journals are to be on sale and some refreshments are available during the convention period.
6. Smoking is strictly prohibited on and around the campus.

[To Presenters]

1. All rooms are equipped with PC, projectors, and screens: you may just bring your presentation data. If you are a Mac user, you can bring it with a cable connector. You are advised to try out the equipment prior to your presentation, either before the first session starts or during lunch time.
2. The length of presentation is 30 minutes including questions and answers. Please adhere strictly to the punctual start and finish times of the presentation.
3. Presenters are requested to bring copies of their full papers on their presentation, and a copy of your paper must be submitted to the registration desk. Be aware that extended abstract included in the conference proceedings is NOT a full paper. One MUST get prepared for paper distributions (approximately 20 copies may be needed).
4. In case of cancellation of the presentation, please notify the Office of Academic Services in advance, or any accidental cancellation should be notified by an e-mail to all three addresses listed below.

[To Session Chairs]

1. Please be at the designated room 10 minutes prior to the start of the session.
2. Strictly adhere to the start and finish times of each presentation.
3. In case of cancellation, do not proceed immediately to the next presentation but leave the time slot intact. You will be notified when any accidental cancellation should happen beforehand.

[To CAJ Officers]

1. CAJ officers meeting will be held at 15:00 through 17:00 on Friday, June 21, at Rikkyo University.

General Inquiry:

Junya Morooka

Rikkyo University 3-34-1 Nishi-Ikebukuro,Toshima-ku, Tokyo Japan 171-8501

E-mail: jmorooka@rikkyo.ac.jp

Inquiry about presentation/papers before the convention:

Director of Academic Affairs (Conference Planning) Seiichi Morisaki

E-mail: morisaki@kansai-u.ac.jp

Inquiry about fees before the convention and any inquiry during the convention:

Executive Secretary Koichi Goshima E-mail: cajoffice@caj1971.com

スケジュール

第1日　6月22日（土）

	A会場 （A301）	B会場（A304）	C会場 （A203）
セッション 1 10:00−11:30	学術局セッション （P7） 守崎		
支 部 会 11:40−12:10	北海道（A304），東 北（A301），関 東（A304），中 部（A101），関 西（A301），中国四国（A302），九 州（A302） （P13）		
12:10−13:00	昼　食		
セッション 2 13:00−14:30	コミュニケーション教育（1） 大学教育 （P18・19） 桜木	語りと主体 （P20・21） 河合	対人コミュニケーション （P22・23） 高本
	会場： AB 01		
14:40−15:40	総　会（P13）	司　会：　五島　幸一 挨拶：　宮原　哲(CAJ会長)　　石川　文也（立教大学大学院）	
15:50−16:50	学術講演（P5）	佐藤 学（学習院大学）	
17:00−18:30	シンポジウム（P6）	パネリスト：佐藤学、松本茂、石橋 嘉一　　司会：丸山 真純	
19:00〜	懇 親 会（P13）	**アル テアトロ: 東京芸術劇場2F**　　（司会：大会実行委員会委員長）	

第2日　6月23日（日）

	A会場 （A301）	B会場（A304）	C会場 （A203）
セッション 3 9:00−10:00	コミュニケーション教育(2) 異文化・言語教育 （P24） 綾部	ヘルス・コミュニケーション （P25） 高永	特別講演 講師：Anne Marie Todd （P10）
セッション 4 10:10−11:40	パネル コミュニケーション教育研究会 （P8） 五十嵐	グローバルビジネスと組織 （P26・27） 清宮	特別セッション 日米交歓ディベート （P11）
11:40−12:30	昼　食		
セッション 5 12:30−14:00	コミュニケーション教育(3) 外国語教育 （P28・29） 大橋	パネル レトリック研究会 （P9） 青沼	日本という文脈 （P30・31） 福本
14:00−14:30	公開講演会受付(会場前)		
公開 シンポジウム 14:30−16:30	**公開講演会： キャリア教育におけるコミュニケーション教育**（P12） 司会：　宮原哲（西南学院大学） パネリスト：　本田由紀(東京大学)　谷田川ルミ（芝浦工業大学） 会場：AB01		

SCHEDULE

Day I - June 22 (Sat)

	Room A (A301)	Room B (A304)	Room C (A203)
Session 1 10:00-11:30	How to Get Published in Interntaional Journals (Academic Affairs) (P7) Morisaki	(no program)	(no program)
Chapters 11:40-12:10	Hokkaido (A304), Tohoku (A301), Kanto (A304), Chubu (A101), Kansai (A301), Chugoku-Shikoku (A302), Kyushu (A302) (P13)		
12:10-13:00	Lunch		
Session 2 13:00-14:30	Communication Education (1) College Education (P18・19) Sakuragi	Narrative and Subject (P20・21) Kawai	Interpersonal Communication (P22・23) Takamoto
14:40-15:40	**Convention Hall: AB 01** General Assembly (P13) MC: Koichi Goshima, Akira Miyahara (President of CAJ) Fumiya Ishikawa (Rikkyo Univ.)		
15:50-16:50	Keynote Address by Manabu Sato (Gakushuin Univ.) (P5)		
17:00-18:30	Symposium (P6) Panelists: Sato, Matsumoto, Ishibashi MC:Maruyama		
19:30～	Convention Dinner (P13) ALTEATRO (Tokyo Metropolitan Theatre, 2nd floor)		

Day II - June 23 (Sun)

	Room A (A301)	Room B (A304)	Room C (A203)
Session 3 9:00-10:00	Communication Education (2) Intercultural/Language Education (P24) Ayabe	Health Communication (P25) Takanaga	Special Lecture by Anne Marie Todd (P10)
Session 4 10:10-11:40	Panel Session Division of Communication Education (P8) Igarashi	Global Business and Organization (P26・27) Kiyomiya	Special Session US-Japan Exchange Debate (P11)
11:40-12:30	Lunch		
Session 5 12:30-14:00	Communication Education (3) Foreign Language Education (P28・29) Ohashi	Panel Session Division of Rhetorical Studies (P9) Aonuma	Japanese Context (P30・31) Fukumoto
14:00	Open Registration		
Open Symposium 14:30-16:30	**Communication Education in Career Education** (P12) Panelists : Yuki Honda (Tokyo Univ.), Rumi Yadagawa (Shibaura Institute of Technology) M C : Akira Miyahara (Seinan Gakuin University) Convention Hall: AB01		

学　術　講　演　Keynote Address

学びにおけるコミュニケーションの構造
—対話的実践による学びの共同体へ—

佐藤　学

学習院大学文学部　教授

学び（learning）を三つの対話的実践（対象世界との対話的実践、他者との対話敵実践、自己との対話敵実践）による意味と関係の編み直しとして定義しよう。私は、この学びの定義によって「学びの共同体（learning community）としての学校」を改革のヴィジョンと哲学と活動システムとして提唱し、教師たちと協同して学校を内側から改革するアクション・リサーチを推進してきた。この学びの定義は、ジョン・デューイのコミュニケーション理論とレフ・ヴィゴツキーの発達理論を基礎としている。

ジョン・デューイのコミュニケーションの理論は聴き合う関係を基盤としている。通常、コミュニケーションは「発信—受信」モデルで語られるが、聴き合う関係による学びのコミュニケーション（対話的コミュニケーション）は、むしろ「受容—応答」の関係で構成されている。ここで「聴く」という行為は、それ自体は受動的であるが、同時に能動的でもある。学びにおける聴くという行為のプライオリティは、古代ギリシャ語の「中動相」のような受動＝能動の活動によって基礎づけられている。さらに「学びの共同体」においては子どもも教師も協同的学び（collaborative learning）を方略としているが、この協同的学びはヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の理論にもとづき、学びにおける互恵性（reciprocity）によって支えられている。

この講演では「学びの共同体」を標榜する学校改革と授業改革を実践事例で提示しつつ、そこで直面しているいくつかの理論的検討を要する論題について報告したい。

【経歴】

佐藤　学（さとう・まなぶ） Manabu Sato

1951 年広島県生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。教育学博士（東京大学）。三重大学助教授、東京大学教育学部助教授、東京大学大学院教育学研究科教授を経て、現在、学習院大学文学部教授。東京大学名誉教授。日本学術会議第一部（人文社会科学）部長。日本教育学会前会長。全米教育アカデミー（NAE）会員。アメリカ教育学会（AERA）名誉会員。主な著書に『米国カリキュラム改造史研究』（東京大学出版会）『学校改革の哲学』（東京大学出版会）『教師というアポリア』（世織書房）『学びの快楽』（世織書房）『教育方法学』（岩波書店）などがある。

シンポジウム　Symposium

コミュニケーション学と教育

Communication Studies and Education

司　会：　丸山　真純　（長崎大学）
パネリスト：　佐藤　学　（学習院大学）
松本　茂　（立教大学）
石橋　嘉一　（山形大学）

佐藤学先生の基調講演を受けて、本シンポジウムでは年次大会のテーマである「コミュニケーション学と教育」について、講演者を交えて話をすすめていく。

ＣＡＪでは、少なくとも 2004 年以降、「教育」を年次大会のテーマに掲げてこなかったが、その間、コミュニケーション教育を巡る状況は大きく変化した。今回のシンポジウムでは、授業研究の第一人者であり、「学びの共同体」の提起者でもある佐藤先生とコミュニケーション教育を専門（の一つ）とされるＣＡＪ会員２名にご登壇いただき、「コミュニケーションと教育」「コミュニケーション教育」「教育コミュニケーション」など、様々な観点から年次大会のテーマについてフロアの皆さまと一緒に考えていきたい。

学術局セッション

＜学術論文セミナー＞

Paper Development Workshop

論文を投稿しよう！

海外の学術雑誌への投稿から掲載までの流れ

司　会：　守崎　誠一（関西大学）
パネリスト：　奥田　博子（関東学院大学）
　　花木　亨　（南山大学）

今回の学術局セッションの目的は、CAJ 会員に海外の学術雑誌への投稿から掲載に至るまでの道筋を示すことにある。投稿過程や規定自体は大半の会員にとって馴染みがあるものであろうが、実際には投稿したことがない、投稿してもリジェクトされた経験をもつ人も多いことであろう。そこで、近年、海外の学術雑誌に論文が掲載された実績をもつ研究者をお招きして、投稿してから掲載に至るまでの実際の過程、投稿の際に留意した点、エディターや査読者からどのようなコメント/評価を受け、どのように対応したのか、今後投稿を考えている人への助言など、自らの経験に基づいてお話しいただく予定である。

＊なお、このセッションの前に、年次大会開始に先立ちまして、事務連絡など行います。

＜パネル＞ コミュニケーション教育研究会

Division of Communication Education

ラウンドテーブル II

司　　会 : **五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学）**
ファシリテーター : **吉武　正樹　（福岡教育大学）**
ファシリテーター : **石橋　嘉一　（山形大学）**

昨年の年次大会におけるコミュニケーション教育研究会のラウンドテーブルでは、話題提供者による発表やその後のディスカッションを通して、コミュニケーション教育の今日的課題について検討した。さまざまな意見が交換されるなか、「子どものころからさまざまな他者とのコミュニケーションの流れに自然に溶け込み、関係性の中で自我を醸成する機会が減少することにより、対人コミュニケーションに不安を感じ協同作業にうまく従事できなかったり、円滑なコミュニケーションが保障されない状況を避けたりする人が増えている」という時代的背景および現状が浮かび上がってきた。

さらに、ラウンドテーブルでは高等教育だけでなく初等教育に焦点があたり、積極的な議論がかわされた。そこでは、初等教育でコミュニケーション教育が必要なのか、「読み・書き・そろばん」といった基礎力をつけることがより重要なのではないかという挑戦的な意見や、コミュニケーション教育と意識させないで実はコミュニケーション教育になっているような仕掛けが必要であるといった指摘がなされた。また、初等教育においては特に、カリキュラム外でのコミュニケーションが重要であり、遊びのなかで失敗を重ね、試行錯誤しながら鍛えられるコミュニケーション能力もあるという意見もあった。

以上の議論をまとめると、次に私たちが考えていくべきは、長期にわたる学校教育過程のなかでいかに他者と対峙する機会をカリキュラムの内外に設定し、そこに私たちがどのように介入していくかという教育実践のあり方である。ここで難しいのは、「想定外」の状況においてこそコミュニケーション能力が試されるという意味で、教育実践において「～すべきだ」という明文化された規則を教えるやり方では「想定内」を超え出ることがない、という逆説が存在することである。しかし、この逆説の鎖を断ち、人間の成長を可能にするのもコミュニケーション教育である。というのも、コミュニケーション教育とは「コミュニケーション」を通して「コミュニケーション」を教育するという二重性を常にはらみ、「コミュニケーションを通して」という実践はまさにコミュニケーションの「創造性」と直結しているからである。

現時点で、コミュニケーション教育研究会の発起人からこのような大きな問題に対し、示唆的な提言を行うには時が熟してはいない。むしろ、前回のラウンドテーブルの続きとして参加者を含めた形で議論を継続し、多様な教育実践をボトムアップ的に吸い上げながら、コミュニケーション教育研究会が目指す方向を協同的に模索していきたい。また研究会のあり方としても、発起人や講演者がトップダウン的に提言や話題提供をする段階から、前回・今回のようにコミュニケーション教育に関心を持つ多くの研究者や実践者をコミュニケーションの渦に巻き込みながら、コミュニケーション･ダイナミズムを原動力とした研究の段階へと進めるきっかけとしたい。

＜パネル＞　レトリック研究会

Japan Society for Rhetorical Studies

レトリック研究会座談会
−レトリック・教育・＜もの＞づくり−

司　会：　**青沼　智　（津田塾大学）**
発表者：　**藤巻　光浩　（静岡県立大学）**
発表者：　**是澤　克哉　（日本赤十字広島看護大学）**
発表者：　**松林　邦夫　（エリザベス・サンダーズホーム）**

日本コミュニケーション学会（CAJ）レトリック研究会では、年次大会テーマである「コミュニケーションと教育」に関するパネルセッションを設けたい。昨年は日本の大学におけるレトリック教育の現状と将来像について、座談会形式で有意義な意見交換をすることができたが、本年度はレトリック教育と「＜もの＞づくり」の関係について、昨年同様座談会形式で、広く開かれた対話の場を提供したい。今回の企画では、「＜もの＞づくりを」キーワードの一つとして選んだが、そこには、レトリックが扱う、またその教育により生み出すべき「もの（物、者）とは一体何なのかという、私たちの問題意識がある。例えば、「知」「徳」「輿論」「社会」といった「無形物」、また「論文」「作品」「テキスト」といった「有形物」とレトリック・レトリック教育との関わり合い、さらにはレトリック教育を通じた「よき市民」「弁論家」「レトリック研究者」といった「人材（＝者）育成」における問題点等、パネリストおよびフロアの先生方を巻き込み刺激的な議論を展開することを目論んでいる。なお、昨年度同様、本パネルは、レトリック研究会が企画するものであるが、レトリック研究者によるレトリック研究者のためだけの自己完結的な対話に終始することなく、すべての年次大会参加者に開かれた対話の場としたい。研究会所属・非所属問わず、レトリック教育と「＜もの＞づくり」についてご興味をお持ちの多くの皆様のご参加を期待いたしたい。

特別講演

<Special Lecture>

Patriotic Rhetoric and Global Citizenship

講演者： アン・マリー・トッド（サンノゼ州立大学）

全米コミュニケーション学会・国際ディスカッション・ディベート委員会 (NCA's Committee on International Discussion and Debate)の協力の下、日本ディベート協会が主催する日米交歓ディベートツアーの引率者として来日するトッド教授に、自身の専門分野である「環境コミュニケーション」について講演していただく。講演後のやり取りにも時間を割き、環境とコミュニケーションをキーワードとした日米のコミュニケーション研究者の学術交流の場としたい。

講演者プロフィール: Anne Marie Todd is Professor of Communication Studies at San José State University in San José, California, where she teaches courses in argumentation, rhetoric, criticism, and environmental communication. She holds a Ph.D. in Rhetoric and Cultural Studies from the Annenberg School for Communication and Journalism at the University of Southern California (2002). Her research analyzes persuasive environmental messages including the influence of popular culture and advertising on our ecological values and the role of media activism in effecting social change. Her book, *Environmental Patriotism: A Rhetorical History of the American Environmental Movement* will be published by Routledge in July, 2013. Her book *Get Green!* (Heinemann Raintree, 2008) teaches conservation skills for 9-11 year olds. Her scholarly articles have appeared in journals including Public Understanding of Science, Environmental Communication, Ethics & the Environment, and Critical Studies in Media Communication. Dr. Todd serves on the editorial boards for the journals Argumentation & Advocacy and Environmental Communication and on the National Communication Association's Committee on International Discussion and Debate. Dr. Todd is a founding member of the International Environmental Communication Association.

特別セッション

Special Session

＜日米交歓ディベート＞

司会（モデレーター）：**青沼智（津田塾大学）**

ディベーター：

ティモシー・バー(Timothy Barr)（ピッツバーグ大学大学院コミュニケーション学科博士課程）

シャナ・シュルツ(Shanna Shultz)（テキサス州立大学サンマルコス校政治学科）

是澤克哉（日本赤十字広島看護大学講師、元イリノイ州立大学アシスタントディベートコーチ）

滝川泰介（獨協大学 4 年、2012 度全日本討論協会主催大会トップスピーカー）

日米混合チームによる英語ディベート、Todd 教授による講評、試合後のフロアとのやり取りを通して、ディベート教育はもとより、年次大会のテーマである「コミュニケーション学と教育」に関する見識を深めていくことを目的とする。

公開シンポジウム*

Open Symposium

[受付]14:00 [講演]14:30

キャリア教育におけるコミュニケーション教育

パネリスト： **本田 由紀 （東京大学）**
パネリスト： **谷田川 ルミ （芝浦工業大学）**
司　　会： **宮原 哲 （西南学院大学）**

近年、多くの大学で実施されているキャリア教育において「コミュニケーション能力」の育成が目標の一つとして掲げられているが、コミュニケーション能力の定義や測定基準が曖昧のまま、一種の「バズワード（buzzword）」として使われる傾向にある。本シンポジウムでは、大学におけるキャリア教育で展開されているコミュニケーション教育の歴史、現状、将来的展望について、様々な視点から掘り下げて考えてきたい。

＊公開シンポジウムは、日本コミュニケーション学会の会員以外の方も自由に参加できます。

6 月 22 日（土） Saturday, June 22 11:40-12:10

支部会議 Chapter Meetings

各支部でミーティングを行います。部屋割りについてはスケジュール表をお確かめ下さい。
Chapter meetings will be held in the assigned rooms, as listed on the schedule of events.

6 月 22 日（土） Saturday, June 22 14:40-15:40 @ 11 号館地下 1 階 :AB01 (Building 11 : AB01)

総 会 General Assembly

司 会： 五島 幸一

開会の辞： 宮原 哲 （西南学院大学・日本コミュニケーション学会 会長）

挨 拶： 石川 文也（立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科言語科学専攻主任）

6 月 22 日（土） Saturday, June 22 19:00- @アル テアトロ 東京芸術劇場２F（AL TEATRO）

懇親会 Reception ： アル テアトロ（東京芸術劇場２F）

司会： 師岡 淳也（立教大学 大会実行委員会委員長）

東京開催の利を生かし、多くの皆様と交流を図りたちと思います。皆さまのご参加をお待ちしております。

懇親会は 19:00 に開始。池袋駅の目の前、大会会場から徒歩 7 分。

会費 5000 円、大会申込みの際、同時に申込み下さい。

＊当日申し込みは、22 日 13：00 までに（先着 20 名）。

書籍・教育機材の展示

大会会場の休憩室(11 号館 A302)にて、各種の展示を行っています。ご自由にご覧ください。
A variety of educational materials are to be displayed in Room A302.

◆ 宿泊のご案内
本年次大会では、東京での開催のため、CAJ から特定のホテルのご紹介は行いません。各自でホテルのご手配をお願い致します。お手伝いが必要の際は、大会申込みページのトップツアー様へご連絡ください。

◆ 昼食のご案内
日曜日は、大学内の食堂が利用できません。大学周辺には、お弁当屋さん、コンビニエンスストアーなどが多くありますので、各自ご用意ください。従いまして、今大会ではお弁当の申し込み受け付けは行いません。ご了承ください。

6 月 22 日（土） Saturday, June 22

受付　9:30～　**Registration commencing at 9:30**

時間	会場	プログラム　Session
10:00 ｜ 11:30	Ａ会場 (A301)	**＜セッション １＞　　学術局セッション** **学術論文セミナー　　Paper Development Workshop** 論文を投稿しよう！海外の学術雑誌への投稿から掲載までの流れ 司　　会　：　守崎　誠一（関西大学） パネリスト：　奥田　博子（関東学院大学） パネリスト：　花木　享　（南山大学）
11:40 ｜ 12:10	A304 A301 A304 A101 A301 A302 A302	**支部会議　　Regional Chapter Meetings** 北海道支部　Hokkaido 東北支部　Tohoku 関東支部　Kanto 中部支部　Chubu 関西支部　Kansai 中国四国支部　Chugoku & Shikoku 九州支部　Kyushu

昼食　　Lunch

13:00 ｜ 14:30	Ａ会場 (A301)	**＜セッション ２＞** **コミュニケーション教育(1)　大学教育　　Communication Education: College Education** 司会：　桜木　俊行　（ガズテイバス・アドルファス大学） 1. アメリカにおけるコミュニケーション教育 —必修科目としての「コミュニケーション基礎コース」の検討— 青柳　達也　（福岡大学大学院生） 2. 授業評価と学生間コミュニケーション 五十嵐　紀子　（新潟医療福祉大学） 3. 大学教育におけるコミュニケーション学の位置づけ: —非言語コミュニケーション論教授法から見えてくる今後の可能性— 神戸　直樹　（神田外語大学）

時間	会場	プログラム　Session
13:00 ｜ 14:30	B会場 (A304)	＜セッション ２＞ 語 り と 主 体　　Narrative and Subject 司会：　河合　優子　（立教大学） 1. 公害を語る新たな担い手とは —四日市公害の事例を通して考えるその可能性— 池田　理知子　（国際基督教大学） 2. 異文化でのコミュニケーションと子どもの言語教育 田中　真奈美　（東京未来大学） 3. The Demagogic Multitude: －Pan-Oratory as the Collective Unconsciousness of American Populist Movement－ Ryo Kanno　（University of Minnesota）
	C 会場 (A203)	対人コミュニケーション　　Interpersonal Communication 司会：　高本　香織　（麗澤大学） 1. 日米大学生による弁明プロセスの日常体験　—弁明行為とその効果— 島田　拓司　（天理大学） 2. 相違解決のコミュニケーション・モード（二段コミュニケーション技法）の提案 名嘉　憲夫　（東洋英和女学院大学） 3. コミュニケーション論と共感 —アダム･スミスの共感概念をてがかりに— 吉田　杉子　（お茶の水女子大学・國學院大學）
14:40 ｜ 15:40	AB01	総会　　General Assembly 司会：　五島　幸一　（愛知淑徳大学） 開会の辞：宮原　哲（西南学院大学・日本コミュニケーション学会　会長） 挨　拶　：石川　文也（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科言語科学専攻主任）
15:50 ｜ 16:50	AB01	学術講演　　Keynote Address 学びにおけるコミュニケーションの構造 —対話的実践による学びの共同体へ— 佐藤　学　（学習院大学）
17:00 ｜ 18:30	AB01	シンポジウム　　Symposium コミュニケーション学と教育 司会：　丸山　真純（長崎大学） パネリスト：佐藤　学　（学習院大学） 松本　茂　（立教大学） 石橋　嘉一（山形大学）
19:00 ｜	アルテアトロ（東京芸術劇場 2F）	懇親会　　Reception おいしいイタリアン料理を楽しみながら、交流を深めましょう。（会費　¥5,000） オンラインによる事前申し込みが必要ですが、若干の当日の申し込みも可能です（先着 20 名程度）。 懇親会場(アルテアトロ：東京芸術劇場２F)は、大会会場から徒歩 7 分。池袋駅前です。

6 月 23 日（日）　Sunday, June 23

受付　8:30～　Registration commencing at 8:30

時間	教室	プログラム Session
9:00 ｜ 10:00	A会場 (A301)	＜セッション ３＞ **コミュニケーション教育(2)　異文化・言語教育** **Communication Education:　Intercultural/Language Education** 司会：　綾部　功　（東海大学） 1. 異文化状況における日本人大学生の英語コミュニケーション —英語力、自信、積極性、コミュニケーション量の関係— 田島　千裕　（立教大学） 2. A suggestion for teaching organizational writing —A critical reading approach— Yeonkwon Jung（Kansai Gaidai University）
	B会場 (A304)	**ヘルス･コミュニケーション**　**Health Communication** 司会：高永　茂　（広島大学） 1. 獣医療コミュニケーション教育に求められるもの　—獣医師と飼主の意識調査比較から— 杉田　陽出　（大阪商業大学） 2. 介護施設利用者と介護者のコミュニケーションに見る意味の解釈に関する新たな考察 野中　昭彦　（中村学園大学）
	C 会場 (A203)	**特 別 講 演**　**Special Lecture** 「Patriotic Rhetoric and Global Citizenship」 講演者：Anne Marie Todd
10:10 ｜ 11:40	A会場 (A301)	＜セッション ４＞ **パネル　コミュニケーション教育研究会**　**Division of Communication Education** 「ラウンドテーブル」 司　　会：　五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学） ファシリテーター：　吉武　正樹　（福岡教育大学） ファシリテーター：　石橋　嘉一　（山形大学）
	B会場 (A304)	**グローバルビジネスと組織**　**Global Business and Organization** 司会：清宮　徹　（西南学院大学） 1. 英語ディベートのグローバル人材育成における有用性を考察するための概念枠組み 三上　貴教　（広島修道大学） 2. チーム・リーダーのファシリテーション —組織内ワーク・チームを対象としたケース・スタディー 池田　章子　（明治大学大学院生） 3. イノベーション普及理論からみる北米のクールジャパン現象 會澤　まりえ（尚絅学院大学）
	C 会場 (A203)	**特別セッション**　**Special Session** **日米交歓ディベート** モデレーター：青沼　智（津田塾大学） ディベーター：ティモシー・バー　（ピッツバーグ大学） シャナ・シュルツ　（テキサス州立大学サンマルコス校） 是澤　克哉　（日本赤十字広島看護大学） 滝川　泰介　（獨協大学 4 年）

昼食　　Lunch

時間	教室	プログラム　Session
12:30 ｜ 14:00	A会場 (A301)	＜セッション ５＞ **コミュニケーション教育(3) 外国語教育** **Communication Education (3) Foreign Language Education** 司　会：大橋　理枝　（放送大学） 1. 小学校外国語活動でのコミュニケーション能力への一考察 大谷　みどり　（島根大学） 2. 外国語大学におけるコミュニケーション教育 —外国語教育における「コミュニケーション」の意義から— 宮崎　新　（名古屋外国語大学） 田島　慎朗　（神田外語大学） 3. Second Foreign Language Instruction as Communication Education Rudolf Reinelt　（Ehime University）
	B会場 (A304)	**パネル　レトリック研究会**　**Japan Society for Rhetorical Studies** 「レトリック・教育・＜もの＞づくり」 司　会：　青沼　智　（津田塾大学） 発表者：　藤巻　光浩　（静岡県立大学） 発表者：　是澤　克哉　（日本赤十字広島看護大学） 発表者：　松林　邦夫　（エリザベス・サンダーズホーム）
	C 会場 (A203)	**日本という文脈**　**Japanese Context** 司　会：　福本　明子　（愛知淑徳大学） 1. 「奇」に対するまなざし —コンテンツとしての「笑い」がもたらす丹生祭の変容— 塙　幸枝（国際基督教大学大学院生） 2. 言わない／言う必要のない社会からの脱出 —コミュニケーション教育における言語観に関する一考察— 野島　晃子（立命館大学大学院生） 3. Nature and the Japanese —The Nihonjinron after the Great East Japan Earthquake— Naoki Kanbe（Kanda University of International Studies）

受付開始* 14:00 14:30 ｜ 16:30	AB01	**公開シンポジウム**　**Open Symposium** **「キャリア教育におけるコミュニケーション教育」** **シンポジウム** パネリスト：　本田　由紀　（東京大学） パネリスト：　谷田川　ルミ　（芝浦工業大学） 司　会：　宮原　哲　（西南学院大学） ＊CAJ 会員以外の方も自由に参加できます

発表要旨

6 月 22 日（土）　Saturday, June 22　13:00-14:30　Session 2

Ａ会場（A301） **Room A**	研究発表 **Presentation**	コミュニケーション教育(1)：大学教育 **College Education**

アメリカにおけるコミュニケーション教育

―必修科目としての「コミュニケーション基礎コース」の検討―

青柳　達也（福岡大学 大学院生）

大学生を対象としたコミュニケーション能力の育成に関して、アメリカでは今年で 99 年目を迎える老舗の学会「全米コミュニケーション学会（National Communication Association）」の存在や、多くの大学でコミュニケーション学科が設置されている現状等から、コミュニケーション教育の取組は我が国よりも一定程度進んでいるものと言える。また、アメリカではほとんどの大学で「コミュニケーション基礎コース(Basic Communication Course)」（スピーチやパブリックスピーキング）が全学共通の必修科目とされていることから、コミュニケーション教育の意識が非常に高いと言える。その重要性の認識に伴いカリキュラムの提供だけではなく実践方法の開発も進んでおり、戦後間もない頃から、Morreale, S.、Hugenberg, L.、Worley, D.、Pearson, J.C. らによる調査研究が続けられてきた。実に半世紀以上前から「コミュニケーション基礎コース」は研究の対象とされてきているのであり、その知見も豊かに蓄積されてきている。

以上をふまえ本報告では、コミュニケーション教育は現在の日本で初年次教育の必要性が主張されているように大学側の意識が高くなってきているものの、まだ大きな成果は見られていない現状にかんがみ、アメリカにおける「コミュニケーション基礎コース」の成果や課題を分析した先行研究から得られる知見を紹介する。日本では見られない数十年にもわたって継続された取組である「コミュニケーション基礎コース」とその調査研究から学べることは多く、これからの日本におけるコミュニケーション教育に関しての検討材料として寄与できるものであると考えられる。

授業評価と学生間コミュニケーション

五十嵐　紀子　（新潟医療福祉大学）

学生による授業評価アンケートは授業改善、教育の質向上のために行われるとされているが、形骸化している傾向も年々顕著になっている。自由記述欄は、特に記入しないまま提出する学生が多く、本来の教育の質向上のために聞きたい学生の生の声は現れにくい。一方で、学生と個人的に話をしていると、紙面には現れない授業という場の描写、教員と学生との関係性、その中での学生の心情などを垣間見ることができ、それが次年度の授業改善につながることも少なくない。本研究では、学生 2 名に対し非構造化インタビューを行い、そこからアンケートの自由記述欄に書くことの目的、書かないことの意味を考察した。いずれも、教員との関係性で自由記述欄に記入するか否かを決めているのではないかということ、後輩のために授業改善に協力しようという意識は低く、本来の授業改善の目的が十分には果たせていないのではないかという点が指摘できる。一方で、授業や試験に関する情報を上級生が自分たちに提供してくれたように、自分たちも下級生に提供いるという。過去問などの情報交換とは異なり、授業評価アンケートが学生間のコミュニケーションを媒介するものにはなっていないことがわかった。その要因として、自らの利益に関わっていることと、実感できる関わりがあるという 2 つの条件を満たしていないことが挙げられる。単位取得のための効率のよい情報ではなく、授業という学びの場で得た知の継承と発展のために、学生が授業改善や教育の質向上のために積極的に関わることができる仕組みや工夫をすることが、コミュニケーション教育の側面からも重要であると考える。

大学教育におけるコミュニケーション学の位置づけ：

―非言語コミュニケーション論教授法から見えてくる今後の可能性―

神戸 直樹　（神田外語大学）

本発表では、過去 6～7 年の間に出版されたコミュニケーション学関連書籍（例：『現代コミュニケーション学』『よくわかる異文化コミュニケーション』『よくわかるコミュニケーション学』）において展開されているコミュニケーション学の発展に向けた試みを考察し、日本の大学における既存のコミュニケーション関連授業の枠組み（例：「対人」「異文化」「非言語」）の中で、コミュニケーション学の目的を達成しつつ、その魅力を伝えるためにどのようなことができるのかを提示していく。具体的には、著者が 2008 年度から担当している非言語コミュニケション論Ⅰと Ⅱ での教授法の中からいくつかの例を紹介し、そこから今後の大学教育におけるコミュニケーション学の発展の糸口を示していく。たとえば、ここでは、空間、音声、時間などの非言語要素を通して、「コミュニケーションを基礎づけている言説・法・文化」の存在を明らかにするアクティビティなどを紹介していく。

Ｂ会場（A304）	研究発表	語りと主体
Room B	Presentation	Narrative and Subject

公害を語る新たな担い手とは

―四日市公害の事例を通して考えるその可能性―

池田　理知子　（国際基督教大学）

水俣市立水俣病資料館では患者やその家族が担ってきた「語り部」の講話への負担を軽減するためとして、新たな語り手を育てるというアイディアがもちあがっている。水俣病資料館にはこれまでも「語り部補」という制度があり 2 名の男性が登録されているのだが、「語り部」が急に講話を行えなくなったときのピンチヒッターとして位置づけられている彼らの出番は、ここ数年はまったくなかった。今回の案は、この既存の制度をより活性化しようというのがその狙いで、いずれにしろその担い手たちに誰を想定しているかは変わらない。それは、水俣病／水俣病事件の歴史に深くかかわってきた人たちであり、患者やその家族と同じように、自分と事件とのかかわりをこれまで考え続けてきた人たちということである。そこで疑問として浮かび上がってくるのが、時間的に長くかかわっていないと公害を語れないのか、ということである。

本発表では、20 代男性が自ら「語り部」と名乗り、四日市公害について語っているこれまでの活動を追うことで、公害を語る新たな担い手となり得るためには何が必要なのか、これから公害を語り継ぐためには何が求められているのかを考えていく。公害についてこれまで語っていた人たちとは異なる語りの実践があって当たり前だし、「新参者」だからこそ新しい語りが生まれる場合もある。公害患者や患者に長年寄り添ってきたことがこれまでの公害の語り手の条件であったとするならば、そこからはみ出た「よそ者」ならではの語りとはどういうものかを具体的に探っていきたい。

The Demagogic Multitude

―Pan-Oratory as the Collective Unconscious of the American Populist Movement―

Ryo Kanno (University of Minnesota)

American populism in the late-19th century was a radical social movement organized by “the plain people.” In this popular uprising, a heterogeneous coalition of agrarian farmers, industrial laborers, utopian socialists, and minority activists constituted a new power bloc to dismantle the political hegemony of capitalism and the state. In this paper, I attempt to elaborate a new perspective on theories of social movement rhetoric by critically examining American populists’ discourses and practices and by reviewing the literatures of “populism,” “demagoguery,” and “social movement rhetoric.” This paper argues that American populism in the late-19th century was an unprecedented social movement in which the multitude imploded the existing socio-political orders not only by exercising its truly democratic power of rhetoric, but also by creating a demagogic society as a formal manifestation of its collective unconscious. Instead of analyzing the content of populist discourses, this paper draws a critical attention to the rhetorical form of social movement to illuminate that American populism was not only a pan-oratory movement which created a society of collective demagoguery, but also a pseudo-counter-hegemonic movement which performatively appropriated “the power of the *dēmos*,” or the ontology of “the empowered *dēmos*,” in the original sense of *dēmo-kratia*.

異文化でのコミュニケーションと子どもの言語教育

田中　真奈美　（東京未来大学）

アメリカで長期滞在をしている日本人は、自文化を離れ、異文化という特殊な環境で生活することによって、日常の生活の中で異文化コミュニケーションをすることになる。それに加え、異文化の中で家族を築き、子育てをすることになる。アメリカの学校に通う日本人の子どもたちはアメリカ文化の影響を強く受け、英語が第一言語となっていく。

日本人の長期滞在者が子どもの教育、特に日本語と日本文化の継承についてどのように考えているのかと思った。本研究では、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコで 30 年以上長期滞在をしている日本人女性大野俊子さんさん（仮名）（60 代）にインタビュー調査を行なった。異文化での子どもの教育についてどのような問題点があるかを考察する。

結果として、長期滞在者の日本人女性である大野さんは、日本に住んでいた頃にすでに自己が強く確立されており、もともとの活動的で外交的な自己がアメリカでの異文化コミュニケーションを通して、更に強調されていったことが明らかにできた。差別をはじめ、アメリカ人と仕事上関わっていく中で、アジア人であることの大変さを経験し、それを解決していくために自己主張しなければならなかったことが影響していると考える。

子どもの教育については夫とともに強い考え方を持っており、日本語と日本文化を教育していたことが分かった。大野さんは、アメリカで日系人として生きていく子どもたちには、白人とは違う秀でたものが必要で、それが日本語であり、日本文化を知っていることであると考えていた。そのために、二人の子どもを日本語補習校に通学させ、小さいころから、日本語と日本文化に触れさせるようにした。二人の子どもたちは大野さんとは今でも日本語で会話をしている。子どもたちは日系人であることを誇りに思っている。このことは、大野さんの教育の成果であると言える。

日米大学生による弁明プロセスの日常体験

―弁明行為とその効果―

島田　拓司　（天理大学）

本研究は、日米の大学生が日常生活で体験する弁明行為について、被害者（被行為者）と加害者（行為者）の立場から、そのプロセスの解明を試みるものである。弁明とは、社会的に容認できないような不都合な事態に際して、その否定的な意味合いを変えようとする言語行為である。弁明行為は、①問題事象（過失）の発生、②被害者からの説明要求（非難）、③加害者の弁明、④弁明に対する被害者の評価（弁明の効果）という加害者―被害者間の相互作用プロセスとして捉えるのが一般的である。弁明行為の文化比較研究は、場面想定法を用いて、状況面、個人差、あるいは文化差の側面から対人弁明プロセスの規定因を検討したものが多いが、当該文化で日常体験している弁明行為に焦点を当てた研究は比較的少ない。本研究では、弁明プロセスの各フェーズの関連性について調査した。調査対象は、日本人学生 251 名と米国人学生 218 名で、弁明の原因、弁明要求の性質、弁明方略、被害（問題事象）の種類と程度、弁明後の相手との関係について、被害者と加害者の立場から得た回答を分析対象とした。クロス表によるカイ二乗検定の結果、予測通り、問題事象の原因や弁明要求と弁明方略には一定の関係があることが確認された。また、弁明の評価についても、弁解は関係維持を導き、正当化や拒否は関係悪化につながる可能性が確認できた。さらに、問題事象の性質や原因、説明要求がその後の当事者間の関係に一定の影響を与えることが示唆された。結果は概ねこれまでのシナリオ実験で得た知見を確認するものだったが、加害者と被害者の両方のデータで支持された仮説は限定的で、確認された多くが被害者のデータによること、日米大学生の回答にいくらかの相違があることから、原因帰属のバイアスと文化差の観点から考察した。

相違解決のコミュニケーション・モード（二段ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ技法）の提案

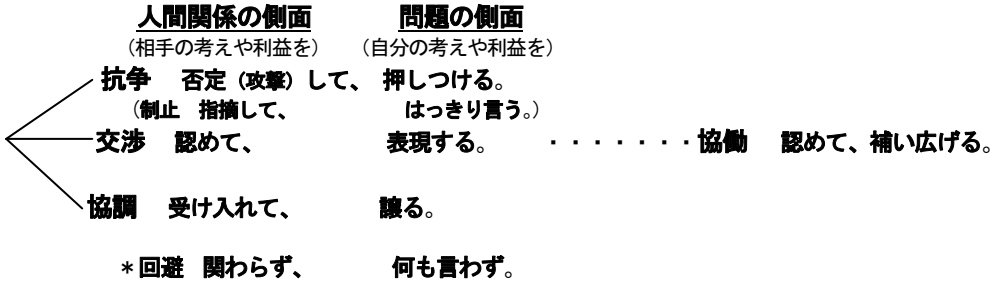
名嘉　憲夫　（東洋英和女学院大学）

１．問題意識：　歴史を通じて、様々なコミュニケーション技法の提案がなされてきた。それらは、弁証法、三段論法、弁論術、中世の修辞法、近代のディベート、議論法、ポラリトネス・ストラテジー、アサーション法、対話法などである。

これらはそれぞれに優れたものであるが、人間の相互作用は、何らかの形の「利害状況」においてなされ、コミュニケーションの仕方もそれとの関連において理解される必要があるという点の認識が弱いように思える。具体的には、どんな「利害状況」においても、常に“分配的側面”と“統合的側面”があり、人々は無意識のうちにそれらに影響されてコミュニケーションを行っているという点への考察が弱いことである。

本報告の目的は、「紛争解決のモード」という視点から、対人コミュニケーションにおいて「利害」の“分配的側面”と“統合的側面”、“人間関係の側面”と“問題解決の側面”を意識したコミュニケーション技法を提案することである。

２．方法：　まず、紛争解決研究分野においてよく知られているK.トマスの「紛争解決処理志向モデル」を紹介し、次に報告者の「紛争解決モードの理念型モデル」（二重関心相互作用モデル）と、「相違解決のコミュニケーション・モード」（二段コミュニケーション技法）の提案を行う。以下がその基本形である。



３．結論：「二段コミュニケーション技法」は、報告者の「コミュニケーション論」や「紛争解決論」の授業、社会人向けの「紛争解決ワークショップ」の参加者によって、すでに10年以上にわたって試され好評である。今後とも様々なフィールド・テスティングを経て、理論的な課題の検討や技法の改善を行なっていきたい。

コミュニケーション論と共感

―アダム･スミスの共感概念をてがかりに―

吉田　杉子　（お茶の水女子大学・國學院大學）

アダム・スミスは通常経済学者として知られているが、『国富論』が公刊されるまでは、道徳哲学者として知られていた。スミスは、スコットランドが１７０７年イングランドと合邦して間もない１７２３年、スコットランドに生まれた。その時代のヨーロッパ諸国は、中世の教会主義の崩壊をうけて混沌としていたが、その中で、イギリスは他のヨーロッパに先駆けて近代市民社会を築こうとしていた時代でもある。それゆえ、スミスは、時代的背景による思想的課題すなわち、中世の封建的身分制度が崩壊し、各自の欲望よって行動することが可能となったいわゆる近代的人間を包括する社会の秩序はどのように保つことができるかという問題に直面する。そのような近代市民社会の成立期にスミスは独自の道徳論を展開し、当時大きな反響を呼んだが、ここでは、「想像力によって立場を交換し、他人の身体に移入して（enter into)、ある程度までその人間と同じ人格になってその人間の感じた感覚に近いある種の感覚を感じる」という共感概念および共感というある種不確かなプロセスも視野に入れた上で据えられた「公平なスペクテイター」（the impartial spectator）という道徳原理が注目された。

近代市民社会という個人が自由意志で行為をえらびとることのできる時代、人間が言語を用いて相互に円滑なコミュニケーションを取りあうためには、ことばへの認識のみならず、人間の諸性質についての理解が必要である。社会の秩序あるいは道徳的価値評価の基準も人間相互のコミュニケーションを経て成立するものである。私はここで、スミスの説いた「共感」（sympathy）という概念を探求し、そのようなスミスの考察が人間相互のコミュニケーションにどのようなかたちで役立つかという点を考察した。

Ａ会場（A301）	研究発表	コミュニケーション教育(2)：異文化・言語教育
Room A	Presentation	Intercultural/Language Education

異文化状況における日本人大学生の英語コミュニケーション
―英語力、自信、積極性、コミュニケーション量の関係―

田島　千裕　（立教大学）

本研究報告では、海外留学という異文化状況において、日本人大学生の英語力、英語力への自信、英語コミュニケーションへの積極性が､英語コミュニケーション量とどのように関わったかについて､調査結果を示す。具体的には以下の仮説と疑問を検証した。仮説１：英語力、英語力への自信、コミュニケーションへの積極性は、出発前に比べ、異文化での経験を積んだ帰国後の方が高くなる。仮説２：英語力と異文化での英語コミュニケーション量には、相関がない。仮説３：出発前の英語力への自信およびコミュニケーションへの積極性の各変数と、異文化での英語コミュニケーション量には、相関がある。仮説４：異文化での英語コミュニケーション量と、帰国後の英語力への自信およびコミュニケーションへの積極性には、相関がある。疑問１：インタビュや自由回答等の質的データから、各仮説に対する結果にどのような解釈が加えられるか。

調査参加者は、東京都内の私立大学二年生で、１５週間をカナダで過ごした。量的および質的データの分析を含める混合研究法を用いた調査結果を、以下のように報告する。１）*t* 検定の結果、英語力、英語力への自信、コミュニケーションへの積極性は、出発前に比べ帰国後の方が高まった。２）英語力と異文化での英語コミュニケーション量には、相関が見られなかった。３）出発前の英語力への自信と異文化での英語コミュニケーション量に、相関が見られた。４）異文化での英語コミュニケーション量と帰国後のコミュニケーションへの積極性に、相関が見られた。５）質的データから、英語力への自信を持っていた学習者は、コミュニケーション問題に対応する戦略を持ち、意欲的にコミュニケーション行動を取っていた事等が明らかになった。

本報告では、実際の英語力ではなく、英語への自信やコミュニケーションへの積極性といった情意が、コミュニケーション量を左右した調査結果に、考察を加える。

A suggestion for teaching organizational writing
―A critical reading approach―

Yeonkwon Jung　（Kansai Gaidai University）

This study aims to exemplify how critical reading skills are applicable to organizational writing. The data of the study are organizational writing for pursuing multiple purposes (e.g. to inform certain information, to request to act, or to manage organizational image), and they include various speech acts used relatively often in organizational settings. This study attempts to assess the strength and the well-reasoned *argument,* logical links that convince the reader of the coherence of the writer's argument (e.g. logical consistency, tone, organization, and a number of other important sounding terms). It will clarify why we need to take a critical reading approach to teaching and learning organizational writing. It argues that the best way to learn business or organizational writing is probably by training critical reading. One objective of the study is to help readers develop their competence in text analysis and critical inquiry. It to some extent aims to facilitate the development of critical capability.

B 会場（A304）	研究発表	ヘルス･コミュニケーション
Room B	Presentation	Health Communication

獣医療コミュニケーション教育に求められるもの
―獣医師と飼主の意識調査比較から―

杉田　陽出　（大阪商業大学）

本研究では、臨床獣医師 304 人と飼主 378 人から得た調査結果を基に、両者が互いのコミュニケーション行動をどう評価しているのか、そして獣医師の説明に対する飼主の理解度や診察に対する飼主の満足度、両者の信頼関係構築度にはどのようなコミュニケーション行動が影響しているのか、両者の意識比較という点から検証した。まず、獣医師と飼主それぞれのコミュニケーション行動について両者の評価を比較したところ、ほぼ全ての項目において、獣医師よりも飼主の方がその平均値は高いことが判明した。獣医師行動評価に関する結果からは、動物病院選択に際して、飼主は獣医師のコミュニケーション能力の高さを基準にしている様子が窺われる。飼主行動評価に関する結果からは、それゆえ飼主に不足している点を補うコミュニケーション・スキルが獣医師には求められるといえる。次に、「飼主理解度」にどのような要因が関わっているか分析した結果、飼主の「説明する」「聞く」という能力や態度の誠実さ、そして年齢がその判断要因と考えられる。一方、「飼主満足度」と「信頼関係構築度」に関する結果では、獣医師と飼主で違いが見られた。臨床コミュニケーションにおいては、飼主の視点を理解することが獣医師には求められる。これを踏まえた上で、飼主にとっての「飼主満足度」や「信頼関係構築度」を高める獣医師のコミュニケーション行動について見ると、「説明する」「聞く」というスキル的側面よりも、共感を示す、充分な対話や診察時間など、どちらかといえば飼主に対する態度や診察環境が重視されている。飼主のコミュニケーション行動について見ると、説明力の高さや誠実な態度が獣医師との信頼関係を示す要因といえる。

介護施設利用者と介護者のコミュニケーションに見る意味の解釈に関する新たな考察

野中　昭彦（中村学園大学）

Coordinated Management of Meaning Model（CMM）は、意味の多重構造という概念を採用したことで、人間のコミュニケーションにおける意味の解釈の仕組みに関する我々の理解を容易にする（Pearce & Cronen, 1980）。人々はコミュニケーションの過程で情報を与え合い、意味の摺合せを行うことで、互いの真の意味が等しくすることを意図の有無にかかわらず試みている。換言するならば、それは話し手と聞き手の意味の落としどころを探る過程である。両者は自らの体験や知識に照らし合わせながら、相手から発せられる言語、非言語両方のメッセージを解釈しようとするのであるが､互いの経験が寸分違わず一致することなど到底起こりえないため、いかなるメッセージであろうと両者の解釈は完全には同一のものとはならない。意味というものは、言わば近似値で交換されているのである。

本研究は、介護施設において介護をする側とされる側という立場の違いが、上記の近似値での意味の交換によって縮小する過程を見た。外的環境の変化（例えば介護施設への入所）による初期の接触から人間関係が発展するとともに変化するコミュニケーション行動（介護士や看護師との接触）が、メッセージ交換による意味解釈の方法と関連して変化することが推察された。日を追うごとに介護施設の利用者と介護士との間で共通の体験が蓄積され、同時に多くの情報交換が行われることで意味を近似値で交換するにつれ、彼らの言葉使いも同調して変化した。また、互いの意味の近似値への到達と社会的地位や立場の違いから生じる精神的距離の接近には関連があると思われた。観察の結果、若い介護士たちは高齢者に対して介護施設に特有の話し方、接し方を用いることで、意味の近似値に加え、立場の近似値までも等位に調整することが分かった。小論では CMM に対する新しい解釈と世代間コミュニケーションの理解が議論されている。

Ｂ会場（A304） Room B	研究発表 Presentation	グローバルビジネスと組織 Global Business and Organization

英語ディベートのグローバル人材育成における有用性を考察するための概念枠組み

三上　貴教　（広島修道大学）

英語ディベートが、グローバル人材に求められる英語力をはじめとした諸能力伸長に役立つ教育実践活動であると言えるのかどうか、諸提言の内容を検討する。

まず、英語ディベートは大学教育においてどのような有用性があるのだろうか。先行研究における知見を検討することを通して、概念的に確認する。英語ディベートに関しては、高校英語の新指導要領においても言及がある。大学においてはその発展的なディベートの実践が望まれるのか。高校教育との連携、大学専門教育との関連性も踏まえて議論する。

基本的な前提として、英語ディベートにはアカデミック・ディベートとパーラメンタリー・ディベートがあって、両者に期待される効果も同じではない。授業においては、折衷型であるディベートの形式が望ましいことを主張する。

そして、近時大学に対する社会的要請が強い、グローバル人材育成の内容を検討する。こうした要請については、産官主導でなされている実態があって、そこに違和感を覚える大学人も少なくないと推察される。なぜなら、大学は企業の役に立つ人材のみを育てる場ではないからである。

しかしグローバル人材として養成を求められている具体的な諸能力を見れば、大学教育が従来から目標とするそれと大差のないことがわかる。そして英語ディベートの実践が涵養すると仮定される諸能力との接点も多いことがわかる。

本報告においては、英語ディベートとグローバル人材育成論の概念的整理を通して、有用性に関する分析への視座を提供すると共に、アクション・リサーチへと展開するための輪郭を浮かび上がらせたい。

チーム・リーダーのファシリテーション

―組織内ワーク・チームを対象としたケース・スタディー

池田　章子（明治大学 大学院生）

近年のリーダーシップ研究では、リーダー行動が個々のフォロワーに及ぼす影響と集団全体に及ぼす影響の違いについて、再検討する必要性が指摘されている。そこで本研究では、チームの活動プロセスにおけるリーダーのコミュニケーション行動としてファシリテーションに焦点を当て、集団に対するリーダーシップの影響力にいかなる効果をもたらすのかを探索するケース・スタディを行う。

本研究ではファシリテーションの調整モデル（池田，2013）を分析の理論的枠組みとする。本モデルにおいてファシリテーションは「組織内ワーク・チームのリーダーが、チームの活動プロセスを機能的に向上させるために行うコミュニケーション行動」と定義され、１）タスクコミュニケーション行動、２）関

係性コミュニケーション行動、３）リエゾンコミュニケーション行動の 3 つの下位概念から構成される。ファシリテーションの調整モデルは、リーダーがファシリテーションを行うことで、変革型リーダーシップの各要素がチームの集約的なモチベーションの高まりを示すチーム・エンパワーメントのより強い因子になることを議論し、変革型リーダーシップのチーム全体への影響力に対するファシリテーションの調整効果を予測している。

筆者は現在、アパレル企業の一店舗のマネジメント・チームや、高齢者介護施設の地域包括支援担当チームなど、業種や職種の異なる複数ケースを対象としたインタビュー調査を進めている。ケース・スタディの分析結果として、ファシリテーションが起こりうる条件やファシリテーションの調整モデルの各概念間の関係性について、各ケースにおける事実を記述し、ケース間の多様性と共通性の両方の観点からリーダーシップのチーム・レベルの影響メカニズムについて考察する。さらに本研究の結果から、ファシリテーションの調整モデルを精緻化し、より一般化された結果を導く仮説生成についても検討する予定である。

イノベーション普及理論からみる北米のクールジャパン現象

會澤　まりえ　（尚絅学院大学）

アニメ、マンガに代表される日本のポップカルチャーのコンテンツは、「クールジャパン現象」として、ほぼ全世界に普及しつつある。それまで、経済力や産業技術で知られていた日本が、今ではアニメ、マンガなどを中心とする「ポップカルチャーの日本」にシフトしたのである。Douglas McGray が、“Japan’s Gross National Cool” という表現を、 *Foreign Policy* (6/2002)上で用いてから 10 年以上経過した。そうした時代の潮流を受けて、2010 年経済産業省製造産業局に、日本の戦略産業分野である文化産業の海外進出促進、国内外への発信や人材育成等の政府横断的施策の企画立案及び推進を行う「クールジャパン室」が設置され、今後の活躍が期待される。

一方、筆者の調査では、北米におけるクールジャパン現象の中でもアニメ市場のピークは 2003 年、マンガ市場のピークは 2007 年で、その後下り坂となっている。しかし、アニメ・コミックコンベンションの参加者数は今でも増加傾向にある。

これまで、クールジャパン現象は、草の根的に普及したといわれているが、どのようなコミュニケーションチャンネルを通して、どのような人々によって、どのような社会システムの中で広がっていったかについては、断片的にしか論じられておらず、コミュニケーション論的観点から包括的説明がされてこなかったといえる。そこで、本発表では、Everett M. Rogers (1962/2003)の、イノベーション普及理論の４つの要素、①イノベーション（新発想や新製品等）、②コミュニケーションチャンネル、③時間の経過、④社会システムの成員間に伝達される過程、に照らし合わせてクールジャパン現象が北米でどのように普及していったかについて論じる。

Ａ会場（A301）	研究発表	コミュニケーション教育(3)：外国語教育
Room A	Presentation	Foreign Language Education

小学校外国語活動でのコミュニケーション能力への一考察

大谷　みどり　（島根大学）

日本の中等教育における外国語教育と小学校外国語活動において「コミュニケーション」「コミュニケーション能力」が一層重視されている。小学校では、人との関わり・コミュニケーションに重きをおいた外国語活動が必修化され 3 年目を迎え、高校では英語教育の科目編成後 25 年度から「コミュニケーション英語」という科目も登場した。外国語教育においても重視されている「コミュニケーション」について本発表では、日本の初等中等教育の指針となる学習指導要領における目標や、指導要領解説の分析を通して、中高の外国語教育へのつながりを意識しながら、新しく必修化された小学校外国語活動に求められる「コミュニケーション能力」について考察する。

さらに本発表では、国が示す目標のもとに、小学校の授業の中で子どもたちは実際、どのようなやり取りをし、友達とのコミュニケーションをどのように感じているのか、また担任は外国語活動における児童間のコミュニケーションをどのように捉えているのかを、参与観察と、子どもたちへのアンケート・担任へのインタビューをもとに分析する。筆者と、他教科と比較出来る担任の参与観察を通し、特に顕著であった事として、他教科の時間と比較し、子どもたちが互いに積極的に、また楽しそうに関わっている事、また他の時間では消極的な児童が外国語活動の時間には積極的に関わっている事が挙げられる。また子どもたちへのアンケート結果から、人とのコミュニケーション・関わりが楽しいと応える割合が高く、外国語活動が目指しているものが具現化されている事が分かる。同時に、指導要領では語彙の定着は求めていないが、積極的にコミュニケーションを図るためには、子ども達自身が、新しい語彙・表現に慣れることの大切さを感じていることも明らかとなった。

外国語大学におけるコミュニケーション教育

—外国語教育における「コミュニケーション」の意義から—

宮崎　新（名古屋外国語大学）
田島　慎朗　（神田外語大学）

昨今氾濫する「英語コミュニケーション」などのコース名に顕著に表れているように、コミュニケーション能力と外国語（主に英語）の習得は親密的に語られる。そもそもこの親密性は文部科学省（以下文科省）に端を発する「英語が使える日本人」を育成するという目標のもと外国語教育言説にコミュニケーション概念が組み込まれていった結果である。かくして、コミュニケーションは（それがどのような意味であれ）様々な外国語教育の文脈の中での基調的存在となった。この状況の中で、外国語大学（以下外大）は外国語教育の総括的存在として、外国語におけるコミュニケーションを大学全体の目標にまで高めた存在である。文科省が求めた「学士力」の一要素、「日本語と特定外国語」での「コミュニケーション・スキル」は、多くの外大がその教育

理念として何らかの形で大々的に打ち出している。このことから分かるように、外大は文科省の外国語教育理念の体現者であり、その外国語教育の意義は、大学そのものの社会的存在意義に直結する。そこで本論文は、外大で展開されるコミュニケーション教育とその言説を取り上げ、批判的・文化的な立場からそれらを検証することを目標としたい。コミュニケーションを基調とした外大教育は、解放を導き自由な思考を育む土壌としての「場」としてではなく、経済界の要請を受けたコミュニケーション観が支配的になっていることの問題を提示していく。外大教育実践や外大が掲げる教育理念を題材とし、外国語学習とコミュニケーションとの関係性の批判的考察を行い、今後のコミュニケーション教育の質向上の素地作りが最終的な目標である。本論文では一つ目に外国語大学が掲げるコミュニケーション観とコミュニケーション研究者のそれとの違いを検証する。その上で、二つ目に、外国語大学で広く浸透しているであろう実践英語主義が、どのような問題を孕んでいるのかを論じる。

Second foreign language instruction as communication education

Rudolf Reinelt （Ehime University）

In an intercultural understanding of foreign language (FL) learning (FLL), the latter should expand the learners' communication skills and opportunities beyond mere language "learning". With doubtful success in their first FL learning, many Ehime University beginning students in general education courses require this of their second FL learning (2FL). The aim of this study is to explore whether such communication education is actually attained in the author's German courses and in which way. The hypothesis is that the course improves on the students' communication education.

1. In this contribution, the FL education and the interpersonal interaction part of communication study (http://www.caj1971.com/ item 3 and 11) are concerned. Communication education is here operationalized as target language (TL) interpersonal interaction and going beyond TL "material" basics such as pronunciation, vocabulary and grammar, and use in repetitive class practice.
2. In order to triangulate the findings, three research methods are employed:
- a longitudinal study covering the one-year course;
- a case study of the course-final oral exams and written productions
- results from the concluding student questionnaire.
3. Data for the longitudinal study come from a regularly updated moodle class contents file posted after each lesson, which is required reading for the learners and available to researchers as well. The case study is taken from the one-year course final oral and written exam taken by about 40 students every year. The same course's final student questionnaires serve teachers to improve their courses.
4. The results prove the hypothesis by classifying the communication education relevant parts in the course. The video-taped case shows learners speaking with new TL native speakers for 2 to 3 minutes. The hypothesis is further also independently corroborated from students' course final questionnaire results.
5. Ramifications for other FL courses are considered and tasks for future research briefly outlined.

「奇」に対するまなざし
―コンテンツとしての「笑い」がもたらす丹生祭の変容―

塙　幸枝　（国際基督教大学 大学院生）

和歌山県日高川町で毎年１０月に開催される丹生祭は、通称「笑い祭」として親しまれ、近年では観光メディアでもしばしば取りあげられている。本来この笑い祭は、統合された四つの祭を起源とするものではあるが、観光協会発行のパンフレットをみるとその歴史上の複合的な由来よりも、むしろ（観光客にとって訴求力をもつ可読的な記号である）「笑い」および「笑い男」という要素が過度に強調されている印象をうける。また近年では、この祭の主役たる笑い男がグッズ化される、あるいは他のイベントに出演する等、局所的な事象ではあるがキャラクター化やメディアミックスの資源として活用されつつある。

祭の場では、「奇祭」のエキセントリックな光景を見学しようと欲する観光客の願望と、「笑い」という普遍的でわかりやすい性質をもつ記号をもちいて観光客を誘致しようと欲する運営者の意図が出会うことになる。それは見方によっては、現代社会における都市と地方のあいだに介在する非対称性（あるいは他者性・周縁性を刻印された他者、すなわち「奇」へのまなざし）を考察するための格好のモデルを提示するものであるといえよう。本研究では「移動（モビリティーズ）によるローカルな状況からの『脱埋め込み化』」（ギデンズ）、および「『時間的な制限をともなう祝祭』から『空間的な制限をともなう祝祭』への移行」（エーコ）といった見解を援用しながら、丹生祭におけるイメージ変容のメカニズムを明らかにしていく。

笑い祭が観光客によって奇祭としてまなざされるとき、そこでは都市の中心性に対する地方の周縁性、あるいは他の祭との相対化による異質性といった価値づけが前提とされている。結末部では、祭のジャンルにおいては許容され、自己同定の手段にもなりうる「奇」の意味づけを「奇形（フリーク）」の問題と関連づけることで、「『奇』に対するまなざし」に潜在する構造的な関係性の不均衡を問題として析出する。

言わない／言う必要のない社会からの脱出

―コミュニケーション教育における言語観に関する一考察―

野島　晃子　（立命館大学 大学院生）

日本語の中に「心を汲む」「気持ちを察する」「ことばではわからないことがある」といった表現が見られるように、私たち日本人は古くから言語を超えて相手の心を理解する、ことばに多くを頼らない了解こそが最大の相互理解だとする傾向があると考えられる。1960 年代に駐日アメリカ大使も務めた日本研究家ライシャワー（1977）は、その著書の中で、日本人は元来、言語能力への不信があり感情をはっきりとことばで示すことは少なく、内心とは反対にほのめかしやことばを使わないコミュニケーションで表す傾向があると述べている。そして、そのことが日本文化の中では価値あること、美徳として評価される傾向にある。しかし、社会や文化の様式が複雑化し多様化してきた現在、一方ではそうした沈黙の姿勢に対する疑問が起こりつつある。

近年、自分の考えていることを的確に表現することやことばで表すことの大切さなどが注目されるようになってきた。ことばを使った自己と他者との相互行為がコミュニケーションであるとすると、この流れは、たとえば、日本経済団体連合会が 2001 年から行っている「新卒採用に関するアンケート調査」結果にも見ることができる。2012 年 7 月に発表された概要によれば、企業の大学等新卒者の採用選考時に重視した要素の第 1 位は 9 年連続で「コミュニケーション能力」であり、82.6%（複数回答可）を占め、今後ますますこの傾向は強まる可能性が高いといえる。しかし、このアンケート結果が指し示している「コミュニケーション能力」とは、一体何を指しているのであろうか。近代国家形成の時代から現代まで、教育の場における「コミュニケーション」の概念やその位置づけの変遷を見ることから、コミュニケーション教育の土台にある枠組みを捉えなおすことを目指す。

Nature and the Japanese
—The *Nihonjinron* after the Great East Japan Earthquake—

Naoki Kambe　（Kanda University of International Studies）

In this paper, I attend to the *nihonjinron* or portrays of unique or exceptional cultural characteristics of contemporary Japanese society and people emerged after the Great East Japan Earthquake. In particular, I argue that the *nihonjinron* after 3.11 were built upon the following assumption: Nature in Japan is unique and part of the experience of being Japanese includes the "unusual" experience of living with nature including the threat of disasters. I then discuss two specific techniques that many Japanese intellectuals and writers employed in order to articulate cultural uniqueness of the Japanese. First, they emphasized particularistic differences of Japanese attitudes toward nature in comparison with the universal West/Other with the help of well-known scholarly works of Terada Torahiko and Watsuji Tetsuro. Second, they discussed nature-related concepts such as *mujo* (impermanence) and *akirame* (resignation) and their aesthetics in well-known literary works such as *Heike monogatari* and *Hojoki*. Finally, I conclude that these techniques of the *nihonjinron* after 3.11 not only articulate the uniqueness of the Japanese but also represent images to strengthen Japanese identity under the national crisis.

第 43 回年次大会実行委員会　Annual Convention Committee

大会実行委員長　Program Chair

師岡　淳也（立教大学）　　Junya Morooka　(Rikkyo University)

大会実行委員

河合優子	（立教大学）	Yuko Kawai	(Rikkyo University)
久米昭元	（立教大学）	Teruyuki Kume	(Rikkyo University)
灘光洋子	（立教大学）	Yoko Nadamitsu	(Rikkyo University)
松永正樹	（立教大学）	Masaki Matsunaga	(Rikkyo University)
松本茂	（立教大学）	Sigeru Matsumoto	(Rikkyo University)

協力：　トップツアー㈱

実行委員（CAJ）　CAJ Committee Members

①大会プログラム・学術局関連　Convention Program

責任者	守﨑　誠一	（関西大学）	Seiichi Morisaki	(Kansai Univ.)
	師岡　淳也	（立教大学）	Junya Morooka	(Rikkyo Univ.)
	吉武　正樹	（福岡教育大学）	Masaki Yoshitake	(Fukuoka Univ. of Education)
	清宮　徹	（西南学院大学）	Toru Kiyomiya	(Seinan Gakuin Univ.)

②大会プログラム・発表査読者　Review Committee

青沼　智	（津田塾大学）	Satoru Aonuma	(Tsuda College)
宮原　哲	（西南学院大学）	Akira Miyahara	(Seinan Gakuin Univ.)
守﨑　誠一	（関西大学）	Seiichi Morisaki	(Kansai Univ.)
師岡　淳也	（立教大学）	Junya Morooka	(Rikkyo Univ.)
吉武　正樹	（福岡教育大学）	Masaki Yoshitake	(Fukuoka Univ. of Education)

③受付・事務局関連　Registration

責任者	五島　幸一	（愛知淑徳大学）	Koichi Goshima	(Aichi Skukutoku Univ.)
	鳥越　千絵	（西南学院大学）	Chie Torigoe	(Seinan Gakuin Univ.)
	野中　昭彦	（中村学園大学）	Akihiko Nonaka	(Nakamura Gakuen Univ.)
	與古光　宏	（九州産業大学）	Hiroshi Yokomitsu	(Kyushu Sangyo Univ.)

④大会広報関連　Advertisement

責任者	山口　生史	（明治大学）	Ikushi Yamaguchi	(Meiji Univ.)
	小山　哲春	（京都ノートルダム女子大学）	Tetsuharu Koyama	(Kyoto Notre Dame Univ.)
	石橋　嘉一	（山形大学）	Yoshikazu Ishibashi	(Yamagata Univ.)

コミュニケーション学会　会長及び本部（学会事務局）President and Office of the CAJ

会 長　**President**　宮原　哲　（西南学院大学）　**Akira Miyahara (Seinan Gakuin U.)**

学会事務局　**CAJ Office**：

〒480-1197
愛知県長久手市片平９
愛知淑徳大学メディアプロデュース学部
五島研究室内
日本コミュニケーション学会事務局
Phone: 0561-62-4111
E-mail: cajoffice@caj1971.com

Faculty of Media Theories and Production,
Aichi Shukutoku University
9 Katahira, Nagakute-shi, Aichi 480-1197
The Office of the Communication Association of Japan
Phone: 0561-62-4111
E-mail: cajoffice@caj1971.com

入退会、住所等変更、会費納入、及び学会誌バックナンバーと記念図書購入申込に関する問合せ先：
For inquiries regarding membership, dues, and publications:

一般社団法人　学会支援機構
〒112-0012 東京都文京区大塚5-3-13
小石川アーバン4F
Phone：03-5981-6011　FAX：03-5981-6012
E-mail: caj@asas.or.jp

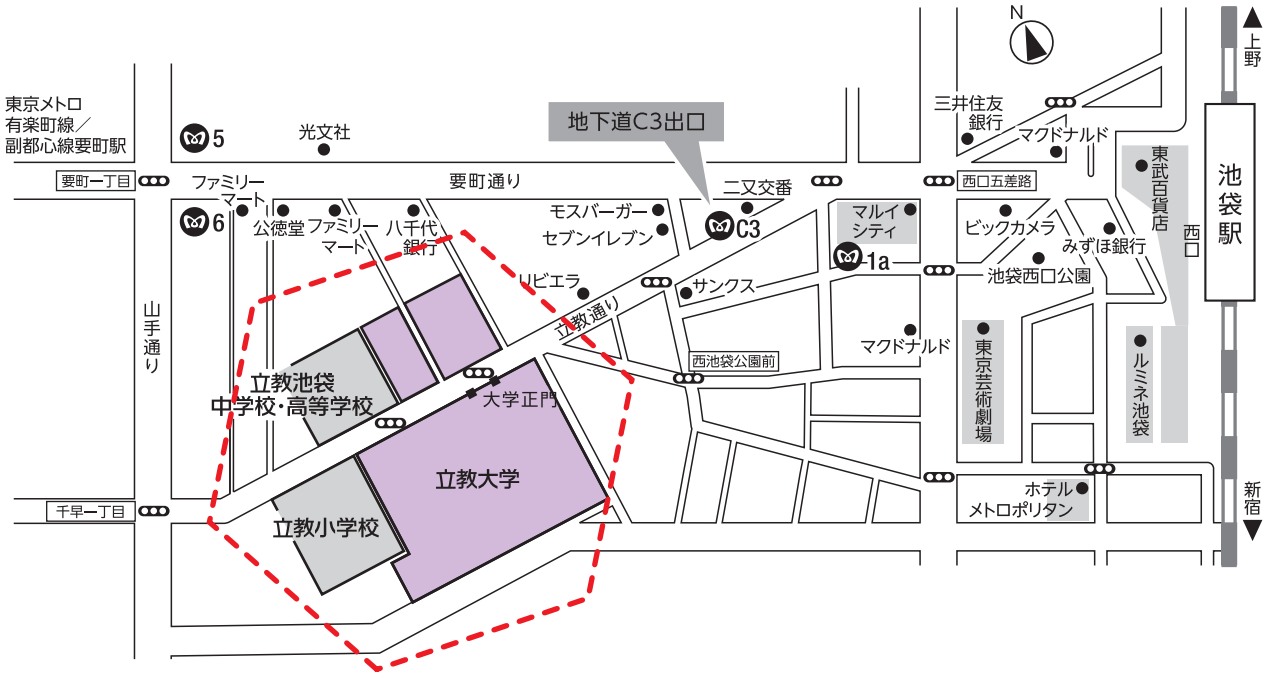
Association for Supporting Academic Societies
Koishikawa Urban 4F
5-3-13 Otsuka Bunkyo-ku Tokyo, 112-0012

立教大学

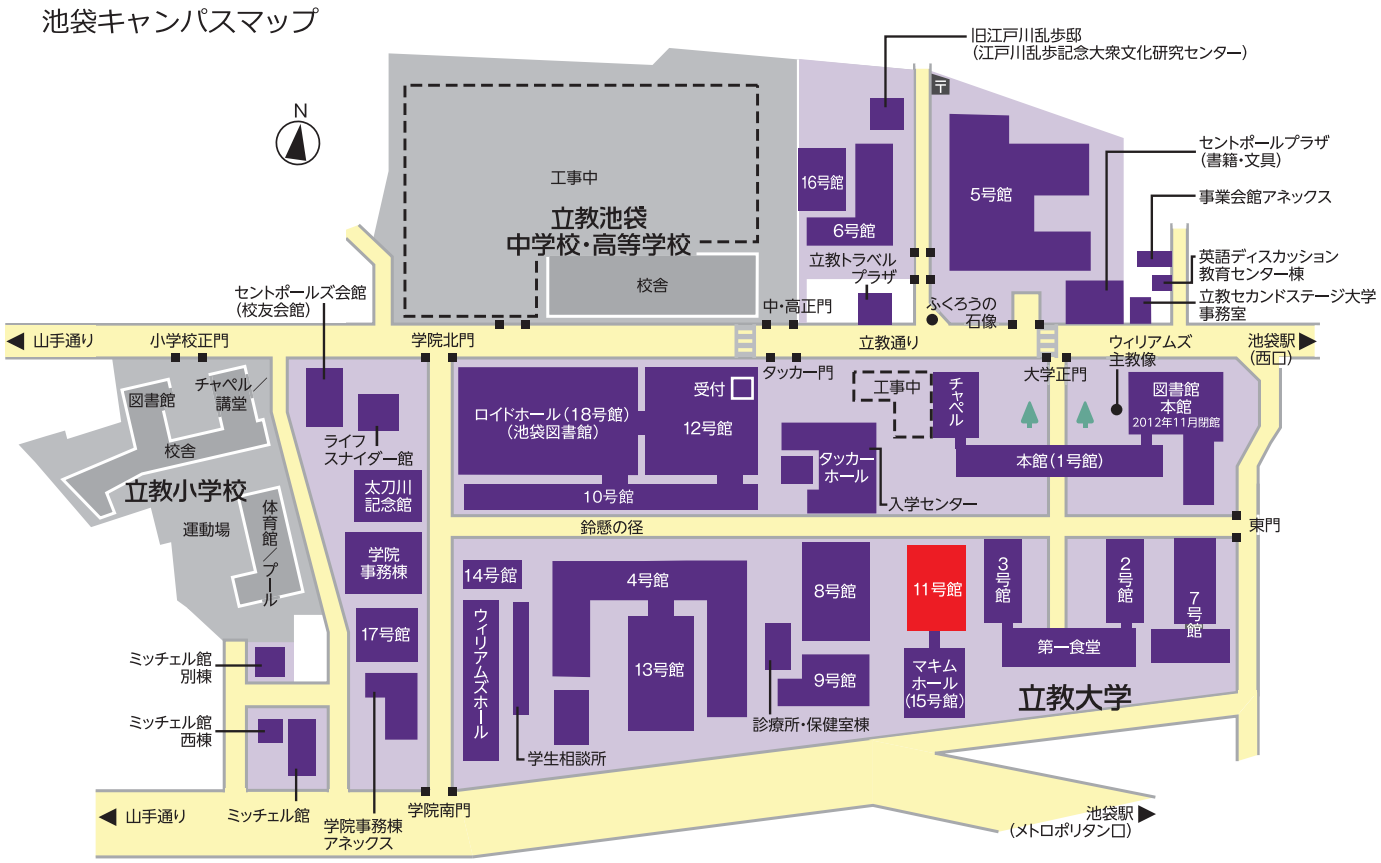
池袋キャンパス　〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

池袋キャンパスへのアクセス

JR 各線・東武東上線・西武池袋線・東京メトロ丸ノ内線／有楽町線／副都心線「池袋駅」下車。西口より徒歩約 7 分。



池袋キャンパスマップ



2012.7